

サンショウにおける摘心の影響と樹勢維持に向けた取り組み

果樹試験場 研究員 松本 大

【要約】

‘ブドウサンショウ’において、発育枝に対する夏期の摘心処理による翌年の着果および樹体への影響について調査したところ、無摘心に比べて翌年の結実性や樹勢が良くなる傾向がみられました。

【背景・ねらい】

現在、県内のサンショウ産地では生産者の高齢化や園地の高樹齢化に伴い、生産量の減少、樹勢の低下などが問題となっており、樹勢を維持しながら、収量を確保できる栽培技術の開発が求められています。そこで、本研究では‘ブドウサンショウ’の発育枝に対する夏期の摘心処理による翌年の着果および樹体への影響について検討しました。

【成果の内容・特徴】

- ・2023年7月下旬（乾燥サンショウ収穫時）に発育枝に対して、伸長量の1/3程度を摘心した区では、2024年7月下旬（乾燥サンショウ収穫時）において無処理区と比べて房あたりの粒数が多くなるとともに、重量も無処理区で6.0gに対して、処理区では6.9gと15%重くなる傾向がみられました(表1)。
- ・2024年10月下旬（落葉初期）において新梢(春枝)の伸長量が長くなるとともに、基部径も太くなる傾向がみられました(表2)。

以上より、‘ブドウサンショウ’において、夏期に発育枝を1/3程度摘心することで、樹勢を維持し、収穫効率の高い果実を生産できることが示唆されました。

表1 摘心による翌年の房あたりの果実粒数と重量への影響 (n=3)

	粒数	重量 (g)
処理区	71.6	6.9
無処理区	58.2	6.0

*値は20房の平均

*重量は乾燥前

表2 摘心による翌年の新梢の伸長量および基部径への影響 (n=3)

	伸長量 (cm)	基部径 (mm)
処理区	13.5	5.0
無処理区	9.6	3.6

*各樹主枝3本について、2年枝から発生した新梢を調査